

あえてひとりごと！

# ひとりごとりが輝ける協働のまちづくりを

一女性住民からみた海士町のいま

島根県中ノ島 奥田美奈子

ちよつと  
一服しませんか？

私は、島根半島の北約四五〜八〇キロ沖に散在する隠岐群島の一つ、中ノ島（海士町）に暮らす一主婦です。海士町は、面積三三・四六平方キロ、人口二五〇二人、一一一四世帯（平成一八年四月末現在）、一島一町の小さなまちです。そんな小さな島のまちづくりが、今、全国の注目を集めています。

じつは、私は平成一五年三月に、一身上の都合で海士町役場を退職しまし

た。あれから丸三年が過ぎ、単独町制の道を選んだ海士町は、私の予想以上に激動し続けています。そして、この間の取り組みが緒に就きかけているいま、町には連日のように視察や取材が入っています。

ここに至るまでには、何より役場（行政）の必死の頑張りがあってのこと。それは町民の誰もが認めるところでしよう。必死で頑張っている人たちに對し、私のような者がウカツなことは言えませんが、あえてひとこと、「ちよつと一服しませんか？」と、勇気を出し

て声を掛けてみたいと思います。

うちの役場は日本一！  
だけど……

役場では、平成一六年度を「海士町ふるさと元年」と位置づけ、「自立促進プラン」を策定、「短期戦略（行財政改革）」「中期戦略（人口施策）」「長期戦略（産業施策）」を町内に説いて回りました。その一つひとつを具体的に書くほどの力はありませんが、たとえばラスパイレス指数七二・四という日本一の低給与（給与カット）にみる

役場の人件費削減。平成一七年度のＩターンが四大家族九一人にのぼる人口増加施策。この数字からして、その取り組みの徹底ぶりがうかがえるでしょう。

そうした「守り」を固めつつ、長期戦略の産業施策では、一点突破をめざし、おもに首都圏域に向けて「切り込み部隊」が放たれたように私は見ておられます。それが、今のまちづくりの中心となつている「島の新産業創出／島まるごとブランド化」です。

二期目に入られた山内町長さんは、「日本一安い給与で、日本一働く職員。そして、われわれの進もうとしている方向性は間違っていない」とおっしゃっています。日本一安い給与で、日本一働く職員——私もそう思います。町民にはその方向性がよく分ならず、最近では少し不安にも思います。私が思うに、首都圏域に向けられた切り込み部隊は、あらゆる手段を使って「海士町ファン」になってくれそうな人や企業の獲得に努め、その方々を

島に招いて実際に見てもらうことで、確かなファンを育てていこうという作戦のようです。彼らの努力が報われて、町にはいろいろな人がどんどんやってくる。しかし、町にはいわゆる「後方支援部隊」が少なく、その人たちの受け入れのすべてを切り込み部隊がやらなければ立ち行かない状態のようです。

後方支援部隊になってくれそうな人がいないわけではないのですが、いちいち説明している時間的・精神的ゆとりがないのでしょう。それでも彼らと並々ならぬ頑張りで、いらした方々は確実に海士町ファンになり、その方たちのネットワークでことはどんどん広がっているようです。

そして、予想もしていなかった新たな取り組みへと発展していくケースもあるようですが、本当はもう手一杯なのに、せっかくなご好意だからとその新たな取り組みにまで一〇〇%の力を出そうとしているようにも見えます。嬉しい悲鳴といいますが、私には、そ

のなかから本当の悲鳴が聞こえてくるような気がするのです。役場職員といえども同じ町民、「みんなホントに大丈夫？」という心配と、「いま取り組まれている一つひとつが、どう繋がってどこに向かっているのか、申し訳ないけどよく分からないのよ」。これが、私の不安の元になっているようです。

「ここまで頑張ってきたのだから、もっと頑張らねば」という気持ちもあるでしょうが、ちよつと一服して、今までの取り組みを交通整理してみるのいいのではないのでしょうか。そして、整理したものを私たち町民に説明し、もつともつと町民へ「協働」を求めたいのではないのでしょうか。

とは言うものの、私たち町民も今のままでは協働のパートナーにはなり得ません。お手数ですが、対等のパートナーになれるように行政の支援をお願いしたいのです。そうしたセクションをしっかりと位置づけ、パートナーづくりに着手することが大切だと思います。

## 楽しいから続いている 「ミントクラブ」の活動

先に述べましたように、私は数年前まで社会教育の仕事を通してまちづくりの一端に関わっていました。それは、地味で時間がかかり、お金になるというものではありません。産

業づくりを中核とする今のまちづくりの取り組みにあつては、簡単に切り捨てられやすいものかも知れませんが、しかし、「島まるごとブランド化」というからには、私たち町民も参画し、輝いていないことには話にならないでしょう。

私のイメージする「小さなパートナー」について、私と仲間のささやかな活動をとおして考えてみましょう。始まりは十数年前、「ハーブがやりたい」という女性が数人集まり、「ミントク

ラブ」が誕生しました。それから、花壇づくりに試行錯誤を重ねること数年、あまりうまくいってなかった頃、第三セクターが経営するホテル前庭で役場が主導する「花のワークショップ」という取り組みが実施され、仲間にいれてもらいました。一区画を借りたもの

の、素人のすること、どうもうまくいきません。

そんな時、東京で開催される日本離島センターの住民研修「島づくり人材養成大学」に公民館の後輩を送り出したところ、ガーデンングの技術指導にあわせてまちづくりも語れる講師との

出会いがあったのです。早速、こちらへ来て指導をしてくれるようお願いし、一年間の講座プログラムを組んでもらいました。

その女性講師から、初回の講座で開口一番、「みなさんは、どんな庭を造りたいの？」と聞かれ、私たちはポツリポツリと「観光客に楽しんでもらえる庭」と答えました。すると、「なら、やめなさい。人のためにやるのではなく、まず自分が楽しむことよ。その姿を見て人も楽しくなるんじゃないの」とおっしゃられました



「ミントクラブ」でつくった「マリンポート・ハーブ・ガーデン」。

た。また、半ばの講座では「この程度の自然、この程度のお魚のおいしさ、これぐらいの島なら全国にいっぱいあるわよ。要は、〃人〃でしょ。そこにどんな人が住んで、どんな営みをしているか、それがその島の魅力よ」と言われました。

そこで、一念発起した私たちは、植わっていたハーブなどをメンバーの家の庭に移し替え、いったん更地に戻して図面を引き直し、男性の力も借りて山から石を運び出したり、まるで土方仕事のようなたいへんな重労働の末、私たちの区画を「マリンポート・ハーブガーデン」に生まれ変わらせたのです。あれから五年、私たち「ミントクラブ」は公民館の手から離れ、細々とではありますが活動を続けています。毎月一回の庭の手入れと、収穫したハーブからポプリやクラフトを作って販売し、活動費を稼ぐというのが主な活動です。

後鳥羽上皇の史跡が残るこの島には、吟行の皆さんがツアーでよく訪ねてこ



奥田美奈子さん、まちづくりの一員として今も活躍中。

られます。年度初めに観光協会にツアーの予定や内容を聞き、店開きの計画をします。初めは慣れない売り子役に抵抗もありましたが、ハーブを媒介にして観光客の方とお話ができることに喜びを感じ、質問に答えられなかったことは反省し、次に備えます。また、ツアーのプログラムである講演などにも便乗して拝聴したりできるのも楽しみの一つです。

.....  
 ささやかな  
 取り組みから始めよう

花のワークショップの時は、いくつものグループが参加していましたが、今も残って花を咲かせているのは「ミントクラブ」の一区画だけです。そこには、公民館の支援があり、観光客との自然な交流があり、仲間とのささやかな楽しみがあるから私たちは続いていると思います。他のグループにもこのような支援があったなら、きっと今ごろは住民の手による花いっぱいホテルになって、そこからいろんな取り組みが生まれていたのではないでしょうか。

こんなささやかな取り組みでも、継続するには大変なこともあります。たとえば、メンバーの減少に悩んでいますが、メンバー獲得を働きかけていた友だちから、このようなことを聞かされました。「ホテルの前庭をきれいにして私たちに何のメリットがあるの?」って言われたよ。私はみんなとおしゃべ

りしてチョット楽しくて、そのことが少し町の役に立ってるかなと思えばそれでいいのよ。私たちは青年団の時からそうだもんね。でも、メリットは……？って聞かれてもハッキリ答えられないよ」。

友だちの口から久しぶりに「青年団」という言葉を聞いて懐かしく思うと同時に、青年団で学んだことの大きさを再認識しました。中ノ島は青年団活動がとても盛んな時期があり、町長はじめ、現在役場の中核として活動している人たちの多くは、その時々の青年団でも中核として活動してきた人たちです。青年団ではいいこともバカなことでも一生懸命やりました。青年団の復活を言うつもりはありませんが、今どきの青年やインターンで来てくれた若い人たちは、いつ、どこで、自分たちが住む町に対する言葉にできないこのような気持ちを培っていくのだろうか、とフト考えたりもしました。

また、ゆるやかな人とのつながりから生まれる「場」の大切さを、公民館

活動を中心にした社会教育の現場で、私は島の人たちから教わってきたように思います。今でも続いている「男の料理教室」もその一つです。主に高齢の男性を対象にした料理教室「まめな会」(方言で「元気かい?」という意味)で、当初は時間がかかってもいいから、ご飯と味噌汁ぐらいは自分たちでつくれるようになりましょう、という声かけから始まりました。カボチャがたくさん収穫できたときはカボチャ料理をつ



「ミントクラブ」のメンバーたち、まずは自分たちが楽しむこと。

くったり、ときには昼間から一杯やったり。そんなことを繰り返していると、「わしらも食って飲んでばっかりじゃなくて、何ぞできることがあれせんかないな」みたいな言葉が出てくるようになります。ボランティア活動が始まったこともありました。とてもささやかな活動ではありますが、誰に強要されたものではない、自発的なものです。こんなことの積み重ねが、いつかは大きな力になっていくのではと気づきました。

また、島の人の言葉にたくさんの元気をもらいました。島には図書館がなく、公民館に図書室があるだけです。そのため、以前から県立図書館の移動バスが年四回町内を巡回してくれていました。毎回それを楽しみにしているおじさんがバスの中でポツリ、「こうしてたくさんの本に囲まれて本を選ぶ、このひととき、文化とはこういうものだね」と言ったんです。これってスゴイ言葉だと思いませんか。私は、この言葉が忘れられません。ですから公民館の図書室の本をダンボールに詰めて、保

健師さんの地区巡回健康相談にくっついていく活動も展開しました。最初のころは、私たちも居心地が悪く、本と地区のみなさんとの間にも距離がありました。この距離を縮めるのが公民館職員役割と思い、「おばさん、どんな本が好き？ 料理の本？ タレント本？」と声をかけると、だんだんと近づいてくれるようになりました。実は、本を借りるとお金がかかると思っていたそうです。笑いながらそのような誤解を解き、世間話ができるようになるとしめたものです。そうなると公民館では、「今日は○○地区だからこのジャンルの本を多めに詰めよう」という配慮ができるようになります。地区のみなさんも本を待っていてくれたり、本を囲んで会話ははずみ、本のまわし読みやリクエストが自然発生的に生まれてきました。立派な図書館があって、たくさん本の本が揃っていることにしたことはありませんが、もっと大切なのは、そこに本を媒介とした気持ちのやりとりがあるということではないでしょう。



ハーブ・ガーデンづくりでは男性陣も助っ人として参加。

か。さりげない言葉のやりとり、こころの交流に私自身も育ててもらいました。

これまでの経験、私たち「ミントクラブ」のささやかな活動を長々と書きましたが、これらの取り組みのなかに、これからのまちづくりに対する何かヒントがあるような気がしてなりません。

小さなパートナーでも、  
いつかは後方支援部隊に！

私には大きなことはできませんが、普通にやっている「ミントクラブ」の活動のなかに、普通に入ってくるようなことであれば、仲間と一緒にやれると思います。小さくてもいい、そんな取り組みが町内の至る所で行われるようなまちづくりであるならば、私も協働のパートナーになれるような気がします。

役場のみなさん、町民のみなさん、そしてこの記事をお読み下さったみなさん、ちよつと一服して、ゆっくりお話でもしませんか？ 「ふくぎ茶」（注）でも入れてお待ちしています。

奥田美奈子（おくだ みなこ）

昭和32年海士町生まれ。和光大学人文学部人間関係学科卒。昭和56年海士町役場入庁、平成15年退職までの20数年間は社会教育一筋。現在は家業の葉タバコ栽培を手伝いながら、プラス事業海士町推進協議会推進員としてまちづくりの一端に関わる。島での女性のライフスタイルの探求、つまり「21世紀型海士のおばさん」を目指している。

注：自生のくろもじの木から作る薬木茶。山陰地方の海岸地域でよく飲まれている。和製のハーブティーといった味わい。